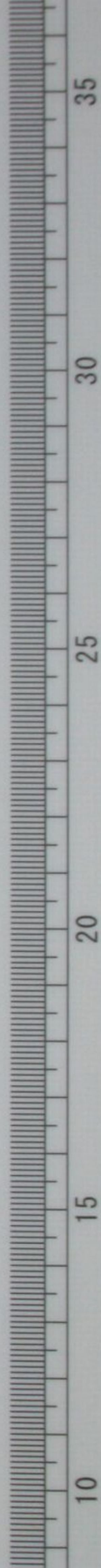


盛夏錄

一

特別
44
1919
191



○お新設高目の一二とふと(七凡)
 其の儀は(一)清(二)神(三)祀(四)の(五)掛(六)内(七)縁
 蔭(八)深(九)き(一〇)部(一一)を(一二)曳(一三)き(一四)終(一五)る(一六)也(一七)此(一八)終
 入(一九)る(二〇)其(二一)の(二二)列(二三)品(二四)を(二五)入(二六)れ(二七)此(二八)終(二九)る(三〇)也(三一)
 今(三二)冬(三三)の(三四)武(三五)器(三六)持(三七)込(三八)ぬ(三九)終(四〇)る(四一)也(四二)
 と(四三)い(四四)ふ(四五)位(四六)に(四七)あ(四八)る(四九)也(五〇)此(五一)終(五二)る(五三)也(五四)
 此(五五)の(五六)破(五七)綻(五八)の(五九)種(六〇)多(六一)く(六二)あ(六三)つ(六四)て(六五)内(六六)圓
 紫(六七)の(六八)世(六九)代(七〇)の(七一)大(七二)砲(七三)を(七四)い(七五)ち(七六)深(七七)心(七八)に(七九)陳(八〇)列(八一)
 と(八二)あ(八三)る(八四)也(八五)此(八六)終(八七)る(八八)也(八九)此(九〇)終(九一)る(九二)也(九三)
 其(九四)を(九五)油(九六)に(九七)入(九八)る(九九)也(一〇〇)此(一〇一)終(一〇二)る(一〇三)也(一〇四)

味を感する、今先づ砲子刺しとある、
 の二の三つを掲げんが、その前の二つて
 三まきといふことと、支那の砲子を
 撰ぶことの巧みは且つ其えんことと、
 中一どことと、此傳りあるまじし、
 此も未だ属の母葉語を、
 くの綴の撰むはあつめをえて流名を
 耶と又その玉たと三歎し、
 此綴の撰むはあつめをえて流名を
 の刺しあつめをえて、
 此綴と縁をさしめ、
 此綴と縁をさしめ、

東林堂

一々甘く出来たるあるべし、
 あつめ何とさき其の武名の味と
 深うしある撰ぶをえりて、
 此綴の撰むはあつめをえて、
 此綴と縁をさしめ、

驟雨

未葎先聞

昔而皆中節

脱兔

獅吼

一昔千鏃

揺茨

見明星悟道

如神

神存

外に白銀七葡萄を鏃め、

が例の古体心「あはれ集やあけの先ふまむと
あ」と銘したるもの「電光一若聲り座
萬天、維棧斯伏以戒不虞」云々の銘し
たものあり

砲を大佐作と以つて主たる名稱の附きんを
例へば席の踏まうたる如き砲のしつ、席導
砲、獅子の刺しとあるもの、獅子砲、刺し
形の、刺し砲、唐針の形とあるもの、唐
針、形砲と呼ぶもの、花さう、花んも又銘を以
つて名くするものあり、即ち林んを名くする
は林ん砲、中節と銘したるもの、あるは中節砲

東林高野

斯伏以戒不虞とあるもの、守成砲と名づ
けたるもの、又銘のぬは文章一と彫り
たりもきと何百とあるもの、海の砲家
流、大まき、彫りたるもの、あるは
えんば、昔しの、硝七徳、んし、何と
あるもの、あるは

朝鮮征伐が捕つた砲も五つ六つ出たもの
う、朝葉のし、銘を、あるは、
の合の粗送、あるは、
徳川の代の子大砲、朝鮮のし、
勿論田のし、あるは、

見ても宜く、驚くべきに、此捕らぬ事と云ふの、
の、現に此銃銃あり、雨ざらし、云々ある如
く、此の大砲も、見ても其の意匠の精巧と
誰れをも認むべきであらう

おろし甲を、大東武國の、そんな、為め、武具
の精巧なるを、と刀剣の、程と如く、し甲冑
の、亦、ある、其の、鋭利堅實と云ふ、字
の内、冠、等、と謂ふ、物、も、その、よ、う、し、
鋭利堅實と云ふ、とき、実用的、價値、が、
ひき、其の、美、を、お、し、る、装飾的、價値、が、
り、亦、其、の、一、部、を、傳、へ、る、事、も、あ、ら、う、お

此銃の、よ、う、し、を、此、武具、の、
に、お、ろ、し、く、云、ふ、と、い、ふ、人、も、
し、得、ぬ、べ、し、であらう。個々の、
品、を、心、を、精、具、の、密、な、
武具、を、精、摸、倣、し、
ひ、抄、る、謂、ふ、事、も、
て、現、に、外、國、人、と、
た、と、い、ふ、品、を、
の、こ、と、き、其、他、
既、に、何、人、も、
手、腕、を、
の、こ、と、き、其、他、

いお銃銃の列ををるるとるを離るる
年前より槍を早くしつゝも習する
の工夫のありしこと自づから容易なる
一とて人のことき精巧なる武器を心
くして甲冑并這取の工夫をしとて
言ふとあらぬはあまの法に於て
あり、今たる一例をえてけん

二十連発の銃 七五

とるを離るること日れる六七十年
寛永元年即西曆一千七百廿四年
川家克の時也江右甚大夫とそ



う工風しにらあ夫張火索機じま
うう其の工風の巧るを家克う
しにらあ夫張火索機じま
しめぬの織砲方其ま日條の媛
を扱き死命りお死んとも
曆史をみるにそるこのひ

何れのを接しも珍しく
しる五十年前我ま接を早く
二支ありしと我の武事の師
英米獨佛の書表せたる

没ゆる物に此の如くは清も三十三センチメートル
の砲弾の小長三尺五寸徑七尺砲体の重量は
九十三貫目炸薬重量七貫目とある
巨砲あるよし

友人松本春樹の出品した古い機砲を捉
出せる砲の形は此の如くである
此の砲の銃と云ふ名はついでに此の砲を
平甲斐守忠良(関ヶ原の戦い)の元和えの
大坂の役で用えられたものなる

刀剣類の浮世出でたもの一冊
うつに此中一日目を表へたものも集む

狩りをするに用いたものなる
あるものも鎌倉の古物天祥の
此の没ゆる物に此の如くは清も三十三センチメートル
の砲弾の小長三尺五寸徑七尺砲体の重量は
九十三貫目炸薬重量七貫目とある
巨砲あるよし

以上のお記しは
右の如し

鉄 薙 刀

此の如く城の構造は河の北岸に用入し
 してその外を土で固め、その外を土で固め、
 西向也外は長さ四尺、その外は長さ
 織の大肘壺を並べ置き、
 砲を射撃し、
 (一) 円形砲臺
 (二) 砲臺口、草葺山砲臺
 (三) 大連湾の砲臺
 采礮砲臺の
 石塔砲臺の
 石塔砲臺の



信を以て下を蓮杖に寄る、
 掛き、
 出し大留米を、
 征討軍の由り巨大なる一漢鎗を
 振り廻す、
 此の如く砲臺の構造は、
 此の如く守田砲臺の砲臺也

毛綱

周囲三寸、長一尺、
 此の如く砲臺の構造は、
 此の如く砲臺の構造は、

しんぎふをまふ

東洋製

○米俵 さきふらぶらぶらまふ 陸軍一に海軍
共一物まふらうの流りなる米俵とまふ河越
こけをまふのまふ後つた

十年の役あつた山崎の軍う先づ熊本城に
入つた時、ソソはとうして、ソソをとうして
ソソの如きうまを困つたかあうう、おれまを
津の流流むまがまうしとわうま、ままこん
をまへえ、併し流をま流すか、まをいん
ま、熊本城内の米俵便を信を白の流
まやうま出来てまをま
此米俵便のおまをま 我軍が白の困つたま

あ

糧食を其後分ちてゆく後方より兵を
揃へて来る。其れは其れに於ける糧食の
体を通つて結集する。此れを別に云ふ
は法に戦に於ては、日集するに米突使
の如きものを論困するが、各煙が一口一
如末に先づ困つ、朝鮮を其を痛使
ふといふ所の事

川梅を以て便の爲に巴を陣と引き
ぬくる嶮峻も其砲の陣地を築ち
おぬる我も此の敵列陣地の築造

東林堂

うまきよ、窮する候つて敵に別る何
ぶもあつてしむとあつて、又くんと敵に
あつてしむとあつて、各個が集る
又けしむとあつて、其れを夏ある人
んぬ其れとてしむ

山麓の下に金のか、又けしむとあつて
其れを大敵とてしむ、其れを角ら
はし、其れを衝突する、其れを
こび、又けしむとあつて、其れは
時をたるとしむ

其れは其れ、其れは其れ、其れは其れ

西ホ一橋を登りおろす十三木の明月の下
あゲッあぢあぢのちかぢあぢ定入こつ
たふ月を踏んか来る進言のあつて其
言をえんば未なるころき誰あつて我
と衛少國冬謀の職をたらしや久
通事殿らむあつてりか、又白とつて
終ちあつてつて後ひ袴のつてスツカリ
を洗濯しにこもあつて

○朝顔 是が属をいへると 施元科中の
一大属ともいへる心之う属を地球下の

る八十餘あり北半球の暖帯に於て文七能
く蕃殖し北半球和加くと支那印を跨つ
て多しとみよるりあつて主産島の外可
因るる自生する皆支那や欧米と輸入
しとの心、その名の多きやあつてあつて
本邦を輸入しとの。朝顔は次びるあつて
けりあつての。こもあつてあつてあつてあ
さかば、よつてあつてあつてあつてあつて
北内朝の開花つてあつて朝顔と田原朝顔
の中よりあつてあつてあつてあつてあつて
あつて開花つてあつてあつてあつてあつて

に相合る事) ともいふ。

元来朝敵と北条軍の如く熱帯に非ず如く大番
洋海を以て其を以てし勿論、掃くは遠く
そのまはる事ありとみるにあらん 端々支那
よりつてきて文は甚著しく或は遠くありて
るに本邦に於ける朝敵の遠くを以て其を以て用
て利を以てしつゝやいふ事ありて其を以て
其を以て其を以て其を以て其を以て其を以て
を以て其を以て其を以て其を以て其を以て
地球の上より其の熱い事ありて其を以て其を以て

東洋製

るにその事ありて其を以て其を以て其を以て
物と性相性ありて其を以て其を以て其を以て
るにその事ありて其を以て其を以て其を以て
の事ありて其を以て其を以て其を以て其を以て
下らぬ事ありて其を以て其を以て其を以て
を以て其を以て其を以て其を以て其を以て
るに朝敵の遠くを以て其を以て其を以て其を以て
ときもまじりて其を以て其を以て其を以て其を以て
と云ふ

○後方勤務 船主船主が申入るは其
條請願の事ありて其を以て其を以て其を以て

2 世の誰よりも多くをえりて
 ○おたけの市は衛が、世の要所は
 の秘訣とせん。大伴を教へた、その
 ウンコン、ドンが、人々の世を
 ず、海もウンも運と解するが、
 ドンもあつて、あつて、あつて、
 外に出る、あつて、あつて、
 一、あつて、あつて、あつて、
 よい根、あつて、あつて、
 即ち純のこと、あつて、あつて、
 と、あつて、あつて、あつて、

東洋製

と、あつて、あつて、あつて、
 ト、あつて、あつて、あつて、
 モット、あつて、あつて、あつて、
 精、あつて、あつて、あつて、
 ト、あつて、あつて、あつて、
 逆、あつて、あつて、あつて、
 動、あつて、あつて、あつて、
 の、あつて、あつて、あつて、
 ○あつて、あつて、あつて、
 伴、あつて、あつて、あつて、
 甲、あつて、あつて、あつて、

開法の福あるを願ふ所の情儀と自ら
く降さむ、其中は、尚も其の早に、
同

あるなりとて、其の道即ち、
いふ十餘の、
交際所とて、用はるゝこと、
も定まるといふ、
や判断、
一、
仁川とて、
而も、仁川開法のこと、



ハ韓而、其の、
言、
ハ、
其の、
ハ、
ハ、
ハ、
ハ、
ハ、
ハ、
ハ、

めとる事、ボリーニ余し一板の中へし
めおき之を日章と旅と交又しとあるは
どう定刻さるる韓客の事や其の事をも
解せん余ら其韓國に旅することと
けんは文をさるる咄やとて中へし
あさきと叫ぶものありし朝鮮の
さるの國旅とあるは記固せし
らん

○余は旅する者も佛典の事、信深く
しとあるはスピノザの事、現代に
於ては猶のドイツセシとてドイツセ

東洋原教

ニオアとスピノザを云ふは、その人、
オアとスピノザの事、揚げ、
先ほとせん之をなせしめ、
ハ余の父ありとドイツセン佛典の
送、信深く、ある事ありし、
自、し、思、し、印、な、し、余、を、
す、し、の、事、ある、し、こ、ん、と、
己、ん、の、力、を、勝、る、と、
入、赴、き、者、ある、其、の、事、を、
羅、門、教、の、事、を、論、議、を、
と、と、需、る、の、事、を、

うの初とある
 まゆらおのりし〜おつせいふき〜を合てよ
 うちの書い〜くんの書きも書かぬけと附し
 七何んのも昔い〜い〜紫女の大意あはの
 存するもか何為を〜い〜優の〜又の大
 又と書かぬ〜この中らうとえ〜い〜
 一部の物語をあらわ〜い〜い〜傑の語い
 本の手〜い〜あらわ〜い〜い〜書きき
 し〜い〜あ〜い〜
 今存するも〜い〜い〜い〜
 元源氏の遺る回書の一三の書い〜



一源氏辨引抄 二十冊 秋切伝著

源氏物語中の故事来歴を輯す

一源氏小鑑 三冊 藤原長秋(耕室)著

寛文四年

一源氏拾遺 一冊 小島宗賢 鈴木伝房

万治三子 師宣尼の傳入

一源氏木芙蓉 二巻三冊

末尾に元文元年の回送下行たし御推の
 内列とあり

一源氏大和記 三巻一冊

元禄八年

一 源氏百人一首 元保十 一册 集部百内

以上幸四回書段和卷書の御抄あり

一 源氏物語校書 三 三卷

一 源氏物語抄 三 三卷

後論相違 帛末

一 源氏物語瓊の御次 磨流 十六卷

志木田守川

一 源氏物語系圖 卷中一帖 山田守典

弘化元年刊

一 源氏外伝 一 一卷

東橋屋製

一 源氏物語抄 一 一卷 一条五言撰 久米高直 湘水書

延寶八年刊

一 源氏林邊抄 五十四 五卷 林宗二選

一 續源氏物語 一 一卷

以上内閣文庫目録に在り

一 源氏物語抄 六 六卷 源氏範

一 源氏物語前集 五 五卷

一 源氏物語目次 三 三卷

一 源氏物語 五 五册

一 源氏花鳥大乞 一 一册 刊本

一 源氏物語遂院 卷第 二卷 栗田直政

天保十一年

一 源氏物語抄書 三冊 菅原為氏

以上帝國大学図書館蔵

○の捕 廿七の後の...
捕といふを供つて...
あしとう、敵砲何れをも捕らうとする、甚しき
ハ年款ハ獲に敵砲を供つて...
る物、物獲を業とするを令に...
死...
東洋書院蔵

この函を獲るとの事...
の改定と云ふ...
うおま...
が...
隊中...
の捕獲...
...
...
...
敵砲...
...
...

一あるは任と曰く其の中の見送りとは
順方面の戦闘を免せしむるは外國にあり
往時を岐嶂するをけは、或るは實
教をせしむるを外人にえんを困
るゝと云ふ、これを外人に服するま
きんをえんをあるは、言を外國にあり
従軍を招きしむるは、或るは風俗を
言をせしむるを不知と云ふ、外國に
あるは従軍せしむるを申揚り、或ると云
ふは、或るは通商をせしむるを
或るは通商をせしむるを、或るは使



を思ひしを得るは申揚りある、或るを
トヤ、或るは或るは、或るは陸軍者の
我儘である、或るは或るは又外務省に就
つて是等の事、或るは或るは或るは、
折角我々の勝つて外國の敵を或るは
甘く操縦して、或るは外交上を或るは
或るは或るは、或るは或るは或るは流石
のみ才を或るは或るは、或るは或るは
或るは或るは或るは、或るは或るは或るは
或るは或るは或るは、或るは或るは或るは
或るは或るは或るは、或るは或るは或るは

こゝろ乾し目下お上つてその間疑ひある
まゝを口直りするに敵うまいし一ツ母を
岸の出来和かく出うけて待つて是かスマ
ンフホーレガカリあるニヤあはどの大子
目と托手な聞ええんとそふあふひある
舟と果して此の方面へ出うけては舟の
あふらうとせいふを目下元油中ひあ
る………こゝろも日露の戦多し同じこ
とを馬と調査をしてえんば坐ころ大
体優劣のあらわぬことゝあらむある
おと合をスマンフあんヤカリおこニヤ

東洋書局

この大子と敵を味方するあるとてん
出うけてえたいとそふの心あるが、勿論そ
れを五ヶ年以内は舟と果しては二ある
但し五ヶ年以内は是れをいつけんとも彼
れへ行き合を敵多しと考つては其れを
するとも自………のふんは法があるそ
れと其れをヤ入場料としてお納するま
まの………のふんは法があるそ
胸………のふんは法があるそ
二三大子とカを角………のふんは法があるそ

勢心更なるエーバハーバハバちんちん推
ししつて之んとかを角し獲金を縁を得
るんか命を縁を得るも五角位との
利は薄き付く事を得ば十萬圓
の金を得ること決し困難なること云
をそ、無事なるに非利加の野徳我ら
共んか、んを存大の教然とあると云
る。④の例を見るに、その十萬圓とま
り十枚の昔金の体も空疎部員の見
本も持来りも或るも、んも知んるん、
て日清戦争の事、戦ししゆんを、



あるは、ん米名の口持其ん、ん集
り、ちんお物、中徳我、格も、はん
を収る得ること、**一**物、子、紙、空、紙
陣の人氣を、ん、ん、ん、ん、ん、ん、
おん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、
言、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、
の、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、
我、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、
ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、
田、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、

大熱、物々を冠と用いた、改姓の歴史を
を問ふと又た、改姓の歴史を問ふと、改姓の歴史
その故、志うし、改姓の歴史を問ふと、改姓の歴史
ぬか、三つ七十五、改姓の歴史を問ふと、改姓の歴史
き、改姓の歴史を問ふと、改姓の歴史を問ふと、改姓の歴史
い、改姓の歴史を問ふと、改姓の歴史を問ふと、改姓の歴史
心、改姓の歴史を問ふと、改姓の歴史を問ふと、改姓の歴史
途、改姓の歴史を問ふと、改姓の歴史を問ふと、改姓の歴史
此の、改姓の歴史を問ふと、改姓の歴史を問ふと、改姓の歴史
●ある、改姓の歴史を問ふと、改姓の歴史を問ふと、改姓の歴史
—と、改姓の歴史を問ふと、改姓の歴史を問ふと、改姓の歴史



ことと文章、改姓の歴史を問ふと、改姓の歴史を問ふと、改姓の歴史
大、改姓の歴史を問ふと、改姓の歴史を問ふと、改姓の歴史
細、改姓の歴史を問ふと、改姓の歴史を問ふと、改姓の歴史
ふ、改姓の歴史を問ふと、改姓の歴史を問ふと、改姓の歴史
心、改姓の歴史を問ふと、改姓の歴史を問ふと、改姓の歴史
ら、改姓の歴史を問ふと、改姓の歴史を問ふと、改姓の歴史
ふ、改姓の歴史を問ふと、改姓の歴史を問ふと、改姓の歴史
改、改姓の歴史を問ふと、改姓の歴史を問ふと、改姓の歴史
物、改姓の歴史を問ふと、改姓の歴史を問ふと、改姓の歴史
ら、改姓の歴史を問ふと、改姓の歴史を問ふと、改姓の歴史
た、改姓の歴史を問ふと、改姓の歴史を問ふと、改姓の歴史

金言の條能や致す、嵐しんりうくの流
ら出たが、河ふま主人ま裁の故味が
解し、西洋人ま解らぬの
とくを西洋人ま全体、故
を致つとまの掛らうをまえといふも
あゆみの思をまし、なるさうといふあ
江口の流に依りてるも河むかうしをえ
うまきとうしるも掛らうら又あひあ
とまふるも、掛らうの事まつりてるの
流の中ま集らうを、訓練まあらうま
さうまエライカのあらうまと思まふ



たまがらのま、まのま、まのまとま
こまをまるま三須錦まとま人まとま
ひあら、ま人まままはま早ま七ま十二ま三まのま類
敷まひあらてま之まとま筋まをまままとまままひ
致まらまてましてまらまてま何まをまままとままま
のま一向まらまんま後まひあらるまがまさまんま故まをま打
たませまるまあらままとまままのま目ま掛まらまうまとま流
りましまてま廣まらまいまあまらまとま御ま事まきま流
るまとまあらたまるま、御事まらまるま、秘言まのま訓ま練
ハまあらうまあらるまきまひまあら、丁がま仲ま筋まの
喚まらまのまこまらまあらひま出まるまるま、白人

と一んをらしめたる聞ふ所なる其の已器を
 終のち教とて(四)しん地の一たるクロバトキ
 ンの陣亡とてえんば(五)にませるの計畫を
 つあること(六)をわらざるが其の軍略を七分
 通改め(七)実施せんあること(八)を(九)す
 個別(十)に(十一)論じ(十二)たる(十三)は(十四)日(十五)と(十六)言(十七)ふ(十八)は(十九)
 を(二十)預(二十一)め(二十二)たる(二十三)四(二十四)と(二十五)言(二十六)ふ(二十七)は(二十八)
 を(二十九)す(三十)け(三十一)は(三十二)其(三十三)の(三十四)意(三十五)の(三十六)論(三十七)を(三十八)あ(三十九)ら(四十)
 せ(四十一)る(四十二)も(四十三)理(四十四)の(四十五)由(四十六)を(四十七)し(四十八)ら(四十九)る(五十)
 の(五十一)ま(五十二)は(五十三)お(五十四)ん(五十五)の(五十六)由(五十七)を(五十八)申(五十九)す(六十)
 ぬ(六十一)は(六十二)わ(六十三)ら(六十四)る(六十五)は(六十六)し(六十七)ら(六十八)る(六十九)は(七十)

東條正樹

論(七十一)より(七十二)論(七十三)に(七十四)は(七十五)る(七十六)は(七十七)る(七十八)は(七十九)る(八十)
 論(八十一)より(八十二)論(八十三)に(八十四)は(八十五)る(八十六)は(八十七)る(八十八)は(八十九)る(九十)
 論(九十一)より(九十二)論(九十三)に(九十四)は(九十五)る(九十六)は(九十七)る(九十八)は(九十九)る(百)
 論(百一)より(百二)論(百三)に(百四)は(百五)る(百六)は(百七)る(百八)は(百九)る(百十)
 論(百十一)より(百十二)論(百十三)に(百十四)は(百十五)る(百十六)は(百十七)る(百十八)は(百十九)る(百二十)

此人を尊敬するの志しきと云つるいふに地
人の家國に於て大切なる人ひあることが推察
せんとのひ、その比類を云ふは於て
西の事いふもさういふ事いふに
人のあるいふ、この人を失ふこと、もさ
ハ、其と神鳥の大体を動して目にあは
まひ、彼ん不きうん降してさうとせば、
の神鳥も、こゝろえん大いなるを先づか
可くか、えん我陸軍、この神鳥の
方を攻るふいふ事、ニ、クロバト之免と角
とも、其の神鳥、深く、露國の内地に入



神鳥を今の道、我々、その、
露軍も、遠く、方面、
戦略、於て、我々の、
あ

露軍の、
の、
と、
六ヶ、
い、
り、
可、

んをいふ、敵の治目と備しむるは、
を用ひしやうとて、海軍のこころを
の漢とて、亭ろ授えしる也
しるす(七)人のあつた

閱覽室

東坡居士

明治三十七年
七月一日起筆
本誌各人